

## 【実践報告2】

# カリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究の取組

大府市立東山小学校 教諭 友田 彰彦

## 1 はじめに

知多半島の付け根に位置する大府市は、名古屋市に隣接しており、交通の便もよくベッドタウンとして栄えてきた。本校は大府市の中央に位置し、全校児童412名、18学級である。校区には農地と住宅地が広がり、比較的のどかな地域である。地域の方々は児童の安全確保のための見守り隊などさまざまな形で学校教育に協力的である。温かな土地柄と地域の方々に支えられ、真面目で思いやりの心をもった素直な児童が育っている。一方、従順であるがゆえ、自ら考えて行動するよりも指示を待つ姿が見られる。

本校は平成22年度に総務省委嘱「フューチャースクール推進事業」、平成24年度文部科学省委嘱「学びのイノベーション事業」、平成30年度大府市ICTプログラミング教育推進校の指定を受けタブレット端末を活用した協働学習の実証研究に取り組んできた。その結果、学習に消極的であった児童が、プログラミングを通して積極的に学習に取り組んだり、正答を求めて深く考え、試行錯誤したりする変容が見られた。児童用タブレット端末及び教師用タブレット端末は、2人に1台の割合で整備されている。児童はタブレット端末の扱いにも慣れ、既習事項の確実な習得のための反復学習や総合的な学習の時間における調べ学習など、さまざまな場面で楽しみながら活用している。また、開校より、異学年の交流活動として、1年生～6年生を縦割り班に分けて活動する「けやきっこ活動」を行ってきた。低学年はこの活動をとっても楽しみにしており、高学年は下級生の役に立つことで喜びを感じている。

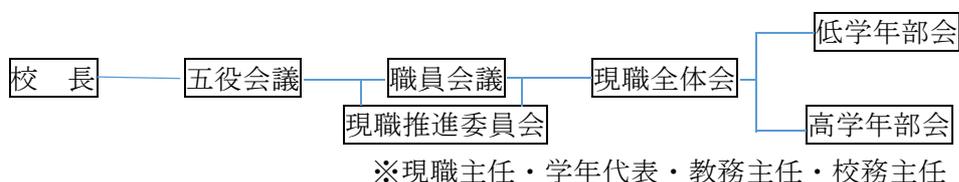
以上のことから、プログラミング教育、けやきっこ活動を軸として、本校の教育活動を推進することは、自主性や心豊かな児童を育てるのに有効だと考えた。そこで、教育課程全体を通じた取組と教科等横断的な視点から、これらを軸とした教育活動の改善について実践研究をしていくこととした。

## 2 研究の経過

### (1) カリキュラム・マネジメントの理解と、教育目標（目指す子どもの姿）の共通理解

#### （グラウンドデザインの作成）

- ① 学校の教育目標の実現に向けた現状の把握
  - ア 児童についての現状分析（現状把握シート）
  - イ 学校の内部・外部環境の分析（SWOT分析シート）
  - ウ 学校の現状と課題の把握（カリキュラム・マネジメント検討用シート）
- ② 学校の特色づくりに向けた取組
  - ・学校の現状・課題・将来像に基づいた学校経営の共有化
  - 本校の教育活動の現状や取り巻く環境の整理（カリキュラム・マネジメント分析シート）
- ③ グラウンドデザイン作成の組織



(2) 育成を目指す資質・能力と関連付けた授業改革

- ① 各教科等で育成を目指す資質・能力の検討  
 (資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート)  
 (各教科でのカリキュラム・マネジメントシート)
- ② 育成を目指す資質・能力との関連を意識した授業実践

(3) 学校の教育目標実現に向けた取組

<平成 30 年度>

月	内 容	対象者	研究方法
4	けやっき子活動の推進 (開校当時より)	全教職員	実践Ⅲ
6	カリキュラム・マネジメント検討用シートによる現状分析の仕方についての検討	校長, 教頭 教務, 校務 現職主任	
	現状分析 (アンケートシート)	全教職員	4 (1)①ウ
7	課題の把握と解決策の検討 ・カリキュラム・マネジメント検討用シートのアンケート結果に基づく現状分析 ・課題の把握と解決策の検討	校長, 教頭 教務, 校務 現職主任	
	カリキュラム・マネジメント分析シートを活用した数値による課題の可視化	校長, 教頭 教務	4 (1)②
10	カリキュラム・マネジメント検討用シートによる現状分析のためのアンケートの職員へのフィードバック	全教職員	
11	全国学力学習状況調査による児童の現状分析	教務	4 (1)①ア
1	現職教育 カリキュラム・マネジメント学習会 ・自校の全体計画の作成 ・各教科においてどのような資質・能力の育成を目指すのかを三つの柱で整理	全教職員	
2	学校評価アンケートによる児童の現状分析	教頭, 教務	4 (1)①ア
	次年度東山小グランドデザインの作成	全教職員	4 (1)③
	資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシートを活用し, 自校の児童に付けさせたい資質・能力の設定 (資料4)	教務	4 (2)①
	各教科のカリキュラム・マネジメントシートを活用し, 育成すべき資質・能力の3本柱を, 教科や活動ごとにまとめる	教務	4 (2)①

<令和元年度>

4	重点目標の焦点化	全教職員	4 (2)②
5	低学年 授業計画及び実践 3年 学級活動 研究授業, 協議会 名古屋大学大学院教授 柴田好章 氏の指導・助言	低学年部会	実践Ⅰ
7	高学年 授業計画及び実践 6年 算数 研究授業, 協議会 名古屋大学大学院教授 柴田好章 氏の指導・助言	高学年部会	実践Ⅱ
	1 学期評価アンケート	全児童 全教職員	4 (3)
	実践の分析と検証	全教職員	4 (4)
9	検証を踏まえた全体計画等の見直し, 改善	全教職員	

#### (4) 評価と改善

- ① 学校の教育活動全体を通じた取組の評価
- ② 「教育目標（目指す子ども像）に近づいているかどうか」の評価

### 3 研究の目的

これまで本校では、知多管内5市5町のベースカリキュラムである知多地方教育計画案（通称「知多カリ」）を主に活用してきた。本研究では、プログラミング教育、けやきっ子活動を軸としたカリキュラム・マネジメントの視点で教育課程を見直し、学校の創意工夫と特色ある教育活動を推進することで、学校教育目標「自主的で創造力に富んだ心豊かでたくましく生きる子どもを育てる」の実現を目指す。

### 4 研究の方法

#### (1) 教育目標（目指す子どもの姿）の共通理解を図るための校内研修

- ① 学校の教育目標の実現に向けた現状の把握

##### ア 現状把握シートによる児童についての現状分析

児童の実態を把握するため、平成30年度学校評価アンケート、全国学力・学習状況調査の分析を行った。また研究授業、教職員の聞き取り調査から児童の実態を捉えてきた。

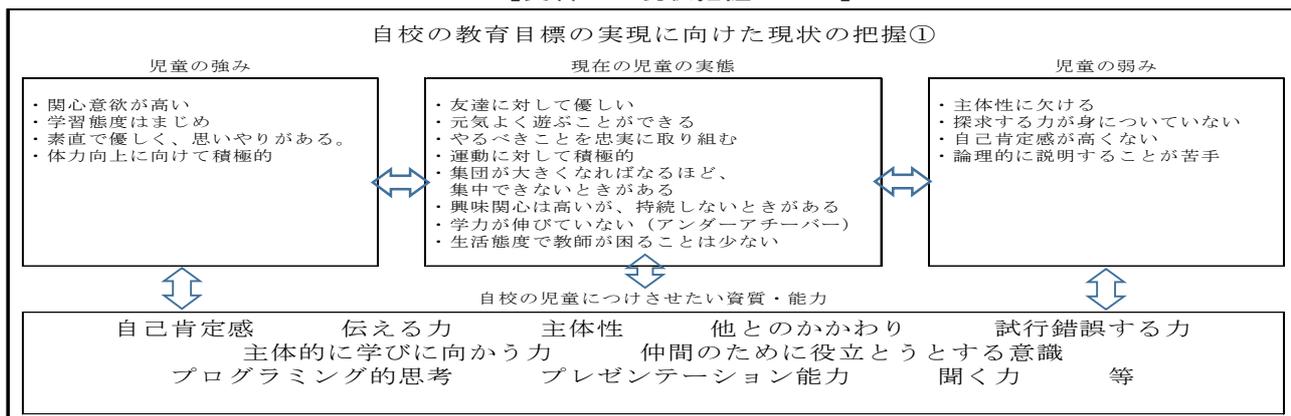
学校評価アンケートでは、「学校は楽しいか」の回答で「よくあてはまる」「あてはまる」は、児童が100%、保護者が92%であり高評価であった。「特色ある学校の取組」についても、保護者の評価は高く、少人数のよさを生かし、縦割り活動に取り組み他学年との交流があり学校生活が楽しく、保護者の安心につながった。タブレット端末を使った授業、プログラミング学習の推進など、将来必要となるリテラシーや資質・能力等を育む授業に力を入れ特色ある学校だという意見が多数あった。

全国学力・学習状況調査からは、国語「読む能力」の領域では全国平均との大きな差は見られなかったものの、「話す・聞く能力」の領域では、正答率が低くやや改善が必要である結果であった。児童質問紙調査の学習に関する設問から、「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」や「学校の予習・復習をしていますか」などの質問に対する自己評価が低かった。主体的な学習への態度を育て、家庭での学習習慣の定着を図ることが今後の学習に関する課題である。

研究授業の児童の様子や教職員の聞き取り調査から、低学年は教わったことを丁寧に取り組む児童が多いが、集中力がそれほど続かず、挙手や発言することに積極的ではないことが分かった。中学年は自分の考えに自信をもてない児童が多い。高学年は、率先してリーダーシップを発揮する児童は多くなく、少しでも自己肯定感や自信を付けさせていく必要があるという意見があった（資料1）。

全校を通して、素直で優しいが自主性が低く、自分の考えを発表することに自信をもてない児童が多いといった意見が多く出された。

#### 【資料1 現状把握シート】



## イ SWOT分析シートによる学校の内部・外部環境の分析

SWOT分析とは、学校の内部環境の具体的な状況を強み（Strength）と弱み（Weakness）に、学校を取り巻く外部環境の具体的な状況を機会（Opportunity）と脅威（Threat）とに分類することにより、多様な観点から特色ある学校づくりや課題の解決策を構築するための手法である。全教職員で、学校の外部と内部の環境や様子について出し合ったものを整理し、分析をしたものを、教職員が共通理解を図りながら外部環境の要因と内部環境の要因を課題解決や特色ある学校づくりにつなげた（資料2）。

【資料2 SWOT分析シート】

		【○:プラス要因 ▲:マイナス要因】	
		【プラス要因】	【マイナス要因】
外部 環 境	Opportunity（機会）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域の方々が協力的である</li> <li>○ PTAが学校に主体的に関わってくれる</li> <li>○ 保護者同士の強い繋がり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▲ 校区が狭い</li> <li>▲ 地域の行事に参加できていない</li> <li>▲ 業務多忙のため、研修を受けにくい</li> </ul>
	Threat（脅威）		
内部 環 境	Strength（強み）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 優しく、のびのびとした生活を送れる児童が多い</li> <li>○ 指示された事に対し、きちんと行うことができる</li> <li>○ 関心意欲が高く学校行事等、意欲的である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>▲ 集団の中で、関心意欲が持続しないときが多い</li> <li>▲ 主体的に活動（探求）することが少ない</li> <li>▲ 論理的に説明することが苦手な児童が多い</li> </ul>
	Weakness（弱み）		

## ウ カリキュラム・マネジメント検討用シートによる学校の現状と課題の把握

本校の実践についての現状と課題を把握するため、全教職員にカリキュラム・マネジメント検討用シートへの回答を求め、集約した（添付資料1）。その中で、重点目標や本校の特色を意識した実践を行うことができていることや職員間の情報の共有化がうまく図られていることが分かった。一方で、テスト結果や研究授業での反省を生かしきれず、次の実践に向けた改善があまり行われていないことが課題として挙げられた。また、教職員の中に少経験者が多い現状から、「リーダーシップを発揮できる人（経験の少ない）の育成を図るようにしていく必要がある」「20代の教職員を指導できる30代40代の教職員が少なく、組織的に考える必要がある」との意見が出された。さらに、「組織構造・組織文化のてこ入れをする必要がある」「プログラミング教育を中心としたカリキュラムの見直しをしていく必要がある」といった記述も見られた。

### ② 学校の特色づくりに向けた取組

SWOT分析シート（資料2）とカリキュラム・マネジメント検討用シート（添付資料1）を1枚のカリキュラム・マネジメント分析シート（添付資料2）にまとめ、本校の教育活動の現状や取り巻く環境を整理し、学校の現状・課題・将来像に基づいた学校経営の共有化を行い、現状分析の手助けとした。

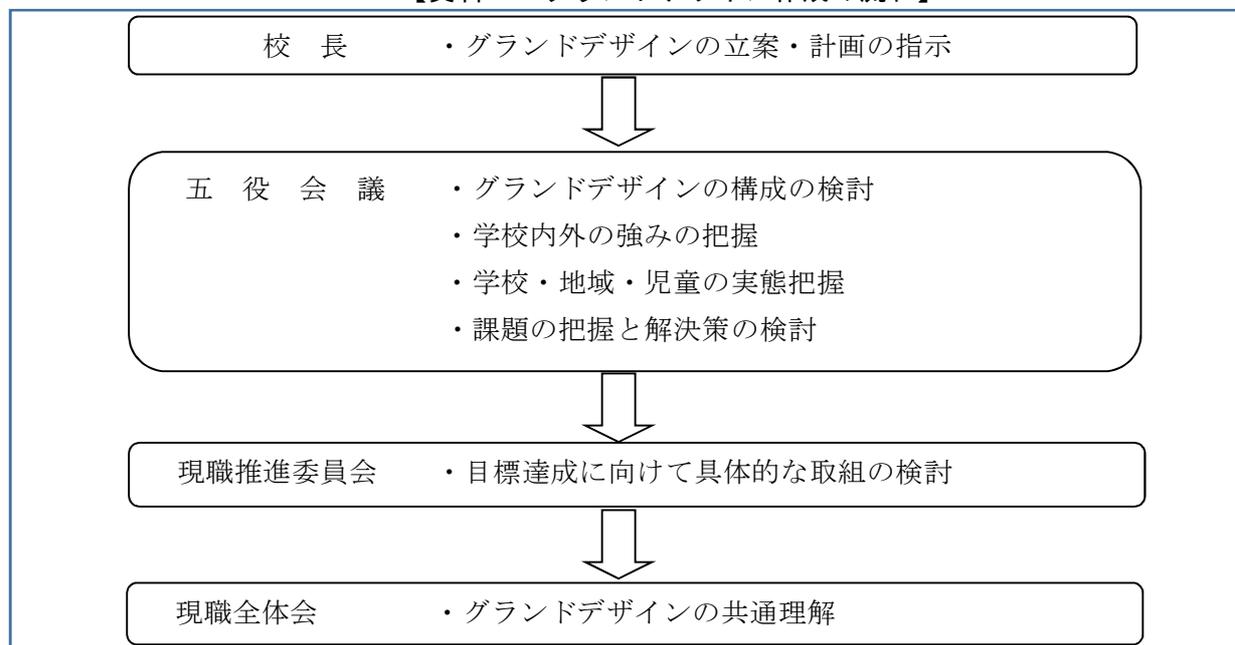
### ③ グランドデザインの作成に向けた取組

カリキュラム・マネジメント分析シートより明らかになった本校の現状を基に、教科等の目標の達成だけでなく、重点目標等をよりよく達成するために、グランドデザインを作成した（添付資料3）。このグランドデザインは、学校の教育活動全体を視野に入れ、児童の実態、学校や地域の特性などを明らかにした上で、校長のリーダーシップの下、全教職員で協議をして共有した（資料3）。

本校の学校教育目標である「自主的で創造力に富んだ心豊かでたくましく生きる子どもを育てる」の達成を目指して、「学校の特色（けやきっ子活動の推進・プログラミング教育の推進と授業力の向上

等)」「学校経営方針」「目指す子ども像」「目指す学校像」「目指す教職員像」「大府市が目指す子どもの姿」「大府市ICT教育の目指す子どもの姿」のつながりを可視化し、全体像をすぐに把握できるようにした。このグランドデザインを基に全教職員で学期ごとに本校の教育活動を評価し、次の教育活動や授業につなげている。

### 【資料3 グランドデザイン作成の流れ】



## (2) 育成を目指す資質・能力と関連付けた授業改善に向けた具体的な取組

### ① 各教科等で育成できる資質・能力の検討に活用した手法

教科等横断的な視点で教育課程を編成、実施するには、「教科等の内容でつなぐ」視点と「育成したい資質・能力でつなぐ」視点がある。「資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート」で、児童をどう育てるかを教科等の枠を越えて、育成したい資質・能力を明確にした（添付資料4）。

一人一人の児童が学校教育目標により近づけるために、現状の把握から、育成または発揮できていない力を洗い出し、「自校の児童に付けさせたい資質・能力」を設定した。また、児童が「育成したい資質・能力」を発揮するために、各教科でどのような指導、取組ができるかを考えて具体的に表した。例えば算数では、学び合いの中で、理解を深め、問題が「解けた」「できた」という達成感を味わわせることで、自己肯定感の高い児童の育成を目指す。生活・学級活動では、アンプラグドプログラミングを活用し、フローチャートの作成時に相手に分かりやすく伝える活動などを通して、伝える力やプログラミング的思考を身に付けた児童の育成を目指す。その他各教科で、児童が「育成したい資質・能力」を発揮するための指導、取組をしていくことで、学校教育目標（目指す子ども像）の達成を目指す。

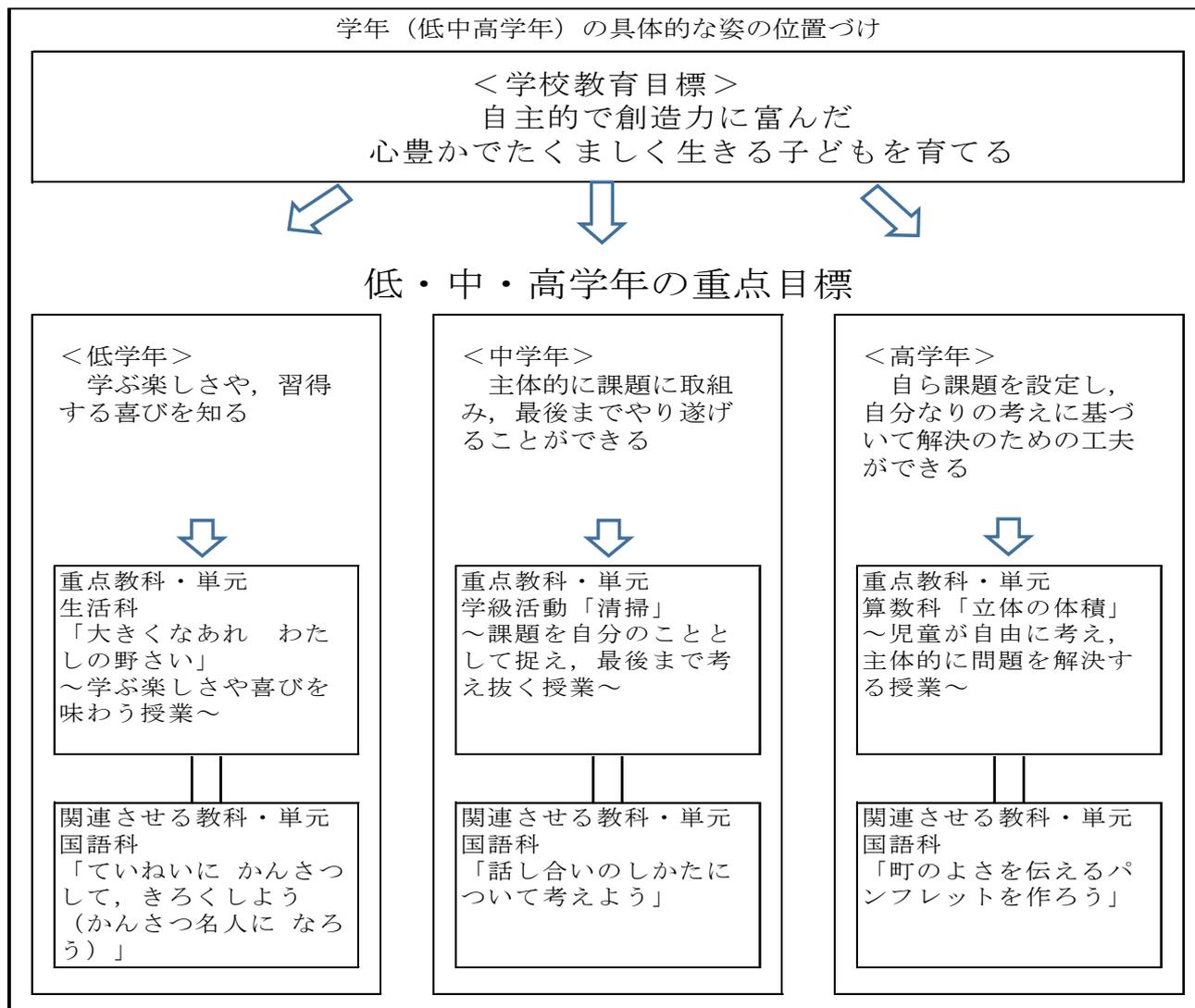
次に、育成すべき資質・能力の三本柱を教科や活動ごとに洗い出し、「各教科でのカリキュラム・マネジメントシート」にまとめた（添付資料5）。このシートを作成したことにより、それぞれの学習や活動で児童に身に付けさせたい力が明確になり、それを意識した単元構成や授業展開を考えることができる。また、一枚の表にまとめたことで、教育活動全体を把握しやすくなり、教科ごとの関連が見え、教科等横断的なカリキュラムを考えやすくなった。

### ② 重点目標の焦点化

学年別の具体的な児童の姿として、低学年「学ぶ楽しさや、習得する喜びを知る」、中学年「主体的に課題に取り組み、最後までやり遂げることができる」、高学年「自ら課題を設定し、自分なりの考え

に基づいて解決のための工夫ができる」として、各学年の目指す子どもの姿を実現するために、重点的に取り組む教科を決めた（資料4）。さらに、重要単元として最適な単元を抽出することにより各学年で指導方法を検討したり、評価したりすることができるようにした。また、より効果的に指導するため他教科との関連を考えた。

【資料4 各学年（低・中・高学年）の重点目標】



③ 育成を目指す資質・能力との関連を意識した授業実践

＜実践Ⅰ＞

中学年の重点目標：主体的に課題に取り組み、最後までやり遂げることができる

1 3年学級活動「よりよい清掃活動をしよう」（4時間完了）

本学級の児童は与えられた課題に対して真面目に取り組むことができる。清掃活動においても開始時刻には清掃場所に移動し、各自で清掃を始めることができている。しかし、自分の役割は分かっているにもかかわらず自分なりの方法で行っているため、手順が効率的でなく時間内に作業が終わらなかつたり、時間が余ったりすることがあった。児童にとって清掃活動はやってあたりまえのこととして認識されているが、主体的に取り組むまでには至っていない。そこで中学年重点目標「主体的に課題に取り組み、最後までやり遂げることができる」に迫るため、学級活動で清掃を題材とした授業実践を行うこととした。まずはそれぞれの清掃班で自分たちの清掃活動を振り返り、問題点を見つけ出した。そして、本時はそれを基によりよい清掃の仕方を話し合った。

## 2 本時（第3時）

### ア 動機付け

前時までに自分たちの清掃活動の問題点について清掃班ごとに話し合い、「時間が足りない」「ごみが残っている」などたくさん  
の問題点が出された。更に出された問題点の中から特に解決が必要なもの  
を各班二つずつ選んだ。本時の導入では、児童が清掃活動をしている  
実際の写真を提示した。その写真を見ながら、自分たちが抱える  
清掃活動の問題点を思い出させた。写真を提示したことで自分  
たちの清掃活動の様子をしっかりと振り返ることができ、前時  
までに考えた問題点をはっきりと意識することができた。また、  
実際の児童の写真を使用したことで、より児童の気持ちを引き  
付け、問題を解決したいという気持ちを高めることができた。



【写真1 写真から自分たちの課題の発見】

### イ 身近な清掃

本単元では、児童にとって身近な清掃活動を取り上げた。自分  
たちが実際に抱えている問題点を題材に取り上げることで、一人  
一人が自分事として捉え、主体的に話し合いに参加することが  
できると考えた。児童にとって毎日何気なく取り組んでいた  
清掃活動だったが、改めて振り返るとたくさん  
の問題点に気付くことができた。児童は清掃活動がスムーズに  
効率よくできるようにしたいという思いから、最後まで真  
剣に話し合うことができた。



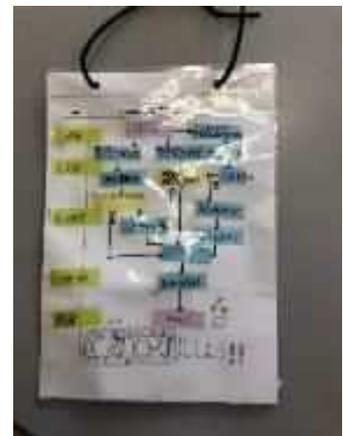
【写真2 グループでの話し合い】

### ウ フローチャートの作成

清掃活動の手順を考えられるようにするために、手順を書いた  
カードを並び替え、フローチャートを作成する活動を設定した。  
1, 2年生は、教師から指導された方法で清掃活動を行っており、  
自分たちで手順を考えるのは初めての経験である。自分たちの  
清掃場所に必要  
な手順を考えさせ、一つずつカードに書かせた。児童はこれ  
までの経験を基に、必要な手順をカードに書き込み始めた。  
初めは必要な手順を時系列で並べていたが、ふだんの  
清掃活動の手順どおりでは課題の解決にはならない。自分  
たちの清掃班の抱える課題を思い出  
し、解決する方法を探そうとさまざまな意見が出され始めた。  
しだいに役割分担をすることで同時に進められる作業を考  
え出し、効率よく清掃活動を行う手順を  
考えることができた。児童は、カードを付箋にしたため、操  
作が容易になり、話し合いながら、カードを入れ替えたり、  
追加したりしながら、話し合い活動を円滑に進めてい  
った。また、時間・分岐・作業のカードを3色の付箋で色  
分けをしたことで、自分の考えを相手に伝えることが得意  
でない児童も、付箋の移動や書き込みを通じて、話し  
合い活動に積極的に参加した。児童が抱える課題の多くが  
時間調整の難しさであったため、台紙に時間軸を示した。  
このことよ  
って、限られた時間の中で行うべき作業の手順を論理的に  
考えることができた。



【写真3 フローチャートの作成】



【写真4 掃除カード】

## エ 事後活動

話し合いで決まった清掃の手順をA5サイズのカードにした。清掃の際には各班の班長がカードを持って清掃場所に行き、手順を確認しながら清掃活動に取り組んでいる。話し合い後は時間内に効率よく清掃活動を行うことができるようになり、自分たちで問題を解決でき児童の自信につながった。

### <実践Ⅱ>

高学年の重点目標：自ら課題を設定し、自分なりの考えに基づいて解決のための工夫ができる

#### 1 6年算数「比とその利用」(9時間完了)

本学級の児童は、積極的に問題解決に取り組む児童と、基礎的な知識や技能が不足しているため自力解決の困難な児童の差が大きい。個別指導により算数が得意でない児童も少しずつ自信をつけ最後まで諦めずに学習に取り組めるようになってきている。しかし、筋道を立てて解決方法を説明したり、発展問題の解決に既習事項をうまく利用したりすることはまだ十分とは言えない。そこで高学年重点目標「自ら課題を設定し、自分なりの考えに基づいて解決のための工夫ができる」を目指し、問題づくりを取り入れた授業構想を立てた。

前時までの学習を生かし本時は比を使ってプログラミングを行い、ロボットを動かす活動を行った。

#### 2 本時(第8時)

##### ア プログラミングを取り入れた動機付け

本時では比を使い、設定された距離をロボットが進むために必要な時間を求める学習を行った。学習の手順を①既習事項を使って比の計算をする②具体物(ロボット:アーテックロボ)を動かすプログラムを組む③ロボットを動かすとし、課題に取り組ませた。課題をステージ4まで設定し、解決できた児童から次のレベルに進ませた。これまで、児童はプログラムを組み画面上のアニメを動かす活動は経験している。しかし、自分のプログラムにより実物を動かすのは初めてのため、とても興味をもって意欲的に課題に取り組むことができた。通常の授業では、算数が嫌いであったり、解答を間違えたりした場合にあきらめていた児童が、プログラミングを通して学習課題に取り組んだことで、周りの児童と教え合ったり、いろいろな方法で考えてみたりしながら、最後まで積極的に取り組み理解しようとする姿が見られた。



【写真5 プログラムの作成】

これまで、児童はプログラムを組み画面上のアニメを動かす活動は経験している。しかし、自分のプログラムにより実物を動かすのは初めてのため、とても興味をもって意欲的に課題に取り組むことができた。通常の授業では、算数が嫌いであったり、解答を間違えたりした場合にあきらめていた児童が、プログラミングを通して学習課題に取り組んだことで、周りの児童と教え合ったり、いろいろな方法で考えてみたりしながら、最後まで積極的に取り組み理解しようとする姿が見られた。

##### イ 問題づくり

ステージ4は、問題づくりの場を設定した。これまで学習したことを生かし自分で課題を設定し解決する場を設けることで、児童はより主体的に学習に取り組み、解決できた達成感を味わうことができるであろうと考えた。ステージ1では問題の解き方を理解しロボットの動きを確認するため、全員でロボットを10cm動かすためのプログラムを考えた。その計算を基にステージ2以降の問題にペアで取り組ませた。多くの児童が、ミリ単位まで正確にロボットを動かすことにこだわりステージ2や3に多くの時間を費やされたが、正確さを追究していこうとする主体的な学びが見られた。



【写真6 課題への取組】

##### ウ ペア活動・自由に相談

今回はロボットを二人に1台配付し、ペアで学習に取り組ませた。どのペアも意欲的に意見を交換し、協力して課題解決に取り組んだ。ペアの交流だけでは多様な意見が出にくい場面では、ペア以外の児童との自由な意見交換もできるようにした。そのため児童はペアで



【写真7 周りの児童との意見交換】

の話し合いに行き詰ると他の児童と積極的に話し合い、課題を解決しようとする姿が多く見られた。自由に意見交換をできるようにしたことで、その中から課題解決の糸口を見つけることができ、難しい課題にも児童が最後まで主体的に課題に取り組めた。

### <実践Ⅲ>

#### 1 けやきっ子活動（縦割り活動）

全校児童を各クラス二つのチーム（大集団：赤チーム・白チーム）に分け、各色を四つに分割して合計八つの集団を構成する（中集団：赤1～4・白1～4）。さらに、各中集団を五つの班に分ける（小集団）。各班に必ず全ての学年が入るようにし、小集団は10人程、中集団は50人程で編成されており、清掃活動、運動会、遊び、ペア読書などさまざまな活動にけやきっ子活動（縦割り活動）を取り入れ異学年が活動しながら交流を

【資料5 けやきっ子活動（縦割り活動）年間計画】

深めている（資料5）。基本的に6年生が中心となって準備や運営を行っており、異学年の子どもたちとの触れ合いの中で、下級生に対する優しさや思いやりなどを学んでいくと同時に、6年生にはリーダーとしての役割を体験させ、これから大人になり生きていくための社会性や協調性を育ませた。また、下級生は、遊びの計画や縦割り掃除などの活動を通して、それぞれの発達段階に応じた役割を果たそうとする態度を養うことを目的とした。

	日	活動内容	
1 学 期	4月26日	リーダー会	
	5月10日	けやきタイムⅠ	顔合わせ・グループ名決め
	5月13日～24日	縦割り清掃①	
	6月6日	リーダー会	
	6月18日～28日	縦割り清掃②	
	6月19日	けやきタイムⅡ	中集団遊び（交流を深める会）
	6月20日	ペア読書	
2 学 期	9月28日	運動会	
	10月1日～11日	縦割り清掃③	
	10月2日	リーダー会	
	10月18日	けやきタイムⅢ	中集団遊び（交流を深める会）
	11月25日～12月6日	縦割り清掃④	
3 学 期	12月5日・6日	ハッピーデー	小集団遊び
	1月15日	リーダー会	
	1月29日	けやきタイムⅣ	中集団遊び（6年生ありがとうの会）
	2月10日～20日	縦割り清掃⑤	

#### ア 縦割り清掃（小集団）

通常はクラスごとに分担された場所の清掃を行っているが、縦割り清掃の期間を年間5回設けている。縦割り清掃ごとに分担場所が変わるため、期間が始まる前に、班長を中心に6年生が学年や男女のバランスを考えながら役割分担を決めている。低学年が困っていたら優しく教えたり、手を差し伸べたりということが自然に起こり、互いに教え合い、助け合い、高め合うという活動になっている。



【写真8 6年生を中心とした清掃活動】

#### イ ペア読書（ペア学年）

読書週間の行事として「ペア読書」を行っている。児童は小集団の中で1年と6年、2年と4年、3年と5年が2・3人でペアを組んでいる。高学年の児童がペアの低学年の児童に読み聞かせをした。高学年の児童は、けやきっ子活動を通してペアと関わる中で相手のことを理解し、ペアの児童が好きそうなお話を選んでいた。児童の中には、読み聞かせの前に自主的に練習し、低学年の児童に分かりやすく読み聞かせをしていた。ペアと仲良く本に親しむ活動は、高学年にとって優しさや思いやりの心を育むよい機会となった。



【写真9 ペア読書】

### ウ 遊び（中集団）

縦割り班で活動する「けやきっ子タイム」が年間4回計画されている。第1回は計画づくりで、体育館、グラウンド、ワークスペース等でどんな遊びをするか、学年を超えて話し合った。低学年の意見も大切に話し合いから、高学年も低学年も全員が楽しめる遊びを決めることができた。第2・3回では、ドッジボール、サッカー、鬼ごっこ、ハンカチ落としなどを行い、6年生は、緊張している1年生に優しく声をかけたり、場を盛り上げたりとその場の状況を見ながら動くことができていた。



【写真10 縦割りグループでドッジボール】

### エ 運動会（大集団）

運動会にも、チーム分け、児童の応援席の位置、応援、縦割りチームでの競技種目（大玉転がし・ダンス）など縦割り活動を取り入れた。6年生が、それぞれの場で全校のリーダーとして活躍しているが、その他にも、ペア学年のお兄さんお姉さんと手をつないで一緒に入場したり、競技前に励ましの声をかけたりと、上級生が下級生のことを気にかける姿が見られた。



【写真11 お兄さんお姉さんと一緒に入場】

これらの縦割り活動を通して、上級生はリーダーとして活躍することで社会性や協調性が育まれ、下級生はこれから自分たちが目指す姿を知ることができた。

## (3) 育成を目指す資質・能力の視点からの評価・改善の取組

### ① 学校の教育活動全体を通じた取組の評価

1学期のカリキュラム・マネジメントの達成度を測るためのアンケートを実施した（資料6）。

その後、田村知子（2014）カリキュラム・マネジメント—学力向上へのアクションプラン—を参考にアンケート項目を次のようにア～カに分類した。「ア. 教育目標の具現化」や「イ. カリキュラムのPDCA」はカリキュラム・マネジメントの核である直接的な教育活動である。これを支える学校内部の条件整備活動が「ウ. 組織構造」「エ. 学校文化」「オ. リーダー」であり、学校外部の規定要因が「カ. 家庭・地域社会等」である。

＜アンケート結果＞

#### ア 教育目標の具現化について

No. 1「学校の教育目標や重点目標を十分に理解してる」、No. 2「各分掌や学年など、それぞれの立場で学校教育目標（目指す子ども像）の達成に向けて取り組んでいる」、No. 3「学年・学級目標を、

【資料6 令和元年1学期 カリキュラム・マネジメントに関する教職員アンケート】

NO	質問項目	4 非常に あて はまる	3 だいた いはま る	2 あまり ない	1 全く あて はま らない	到達 目標 80
1	ア 学校の教育目標や重点目標を十分に理解してる。	4	14	1	0	95%
2	ア 各分掌や学年など、それぞれの立場で学校教育目標（目指す子ども像）の達成に向けて取り組んでいる。	4	14	1	0	95%
3	ア 学年・学級目標を、学校教育目標の下位目標として設定し、指導している。	3	13	3	0	84%
4	イ 学習内容等を児童の実態に応じて、柔軟に変更している。	6	11	2	0	89%
5	イ 既習事項や先の学年で学ぶ内容との関連（系統性）を意識して指導している。	5	11	3	0	84%
6	イ 学校教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる。	1	14	4	0	79%
7	イ 児童の学習成果の評価だけでなく、自身の学習計画や授業の振り返りも行っている。	5	10	4	0	79%
8	イ 各教科等の教育目標や内容の相互関連を意識して、授業を行っている。	4	11	4	0	79%
9	イ 各教科の授業において、児童の主体的・協働的な学習が取り入れられている。	1	14	4	0	79%
10	イ 学力テスト・単元テスト等を参考に、指導方法を具体的に見直し・改善している。	4	10	5	0	74%
11	イ 学校の現職教育の研究テーマを意識して授業を行っている。	2	11	6	0	68%
12	イ 学校の授業研究の成果を授業に生かしている。	2	11	5	1	68%
13	ウ 自分の担当学年・教科だけでなく、学校の教育課程全体で、組織的に児童を育てていくという意識がある。	4	13	2	0	89%
14	エ 学級や学年を超えて、児童の成長を伝えあい、喜びを共有している。	6	11	2	0	89%
15	オ 立場や役割に応じてリーダーシップを発揮している。	4	6	9	0	53%
16	カ 地域の施設・人材・素材を活用している。	1	9	7	2	53%

※実践の際に配慮すべき要素  
 ア・・・教育目標の具現化  
 イ・・・カリキュラムのPDCA  
 ウ・・・組織構造  
 エ・・・学校文化  
 オ・・・リーダー  
 カ・・・家庭・地域社会等

学校教育目標の下位目標として設定し、指導している」は、「4非常にあてはまる」「3だいたいあてはまる」で80%以上を占め、学校教育目標を理解して周知できている。だが、No. 6「学校教育目標や重点目標を意識して授業や行事に取り組んでいる」については、「4非常にあてはまる」の割合が低かった（資料7）。

#### イ 授業・リーダーシップについて

No. 7「児童の学習成果の評価だけでなく、自身の学習計画や授業の振り返りも行っている」No. 10「学力テスト・単元テスト等を参考に、指導方法を具体的に見直し・改善をしている」No. 15「立場や役割に応じてリーダーシップを発揮している」は、「4非常にあてはまる」「3だいたいあてはまる」で80%以下となり、No. 15の項目に関しては、在籍年数が短いほど「2あまりあてはまらない」と回答する傾向が見られた（資料8）。

#### ウ 現職教育について

No. 9「各教科の授業において、児童の主体的・協働的な学習が取り入れられている」、No. 11「学校の現職教育の研究テーマを意識して授業を行っている」、No. 12「学校の授業研究の成果を授業に生かしている」を見ると、「4非常にあてはまる」「3だいたいあてはまる」で80%以下となり、特に「4非常にあてはまる」の割合が低かった（資料9）。

### ② 「教育目標（目指す子どもの姿）に近づいているかどうか」の評価

教員の授業力の把握と授業力向上を目的としたアンケートを、全校児童（けやきっ子アンケート）と全教職員（カリキュラム・マネジメントに関するアンケート）を実施している（添付資料6）。

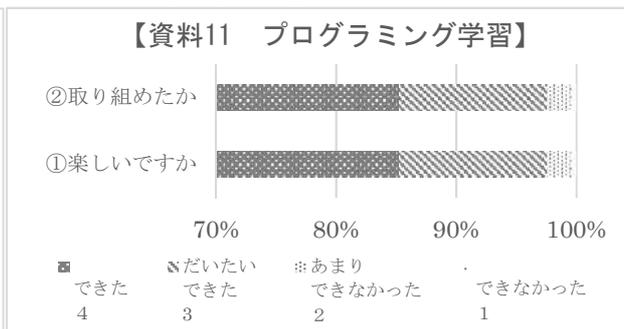
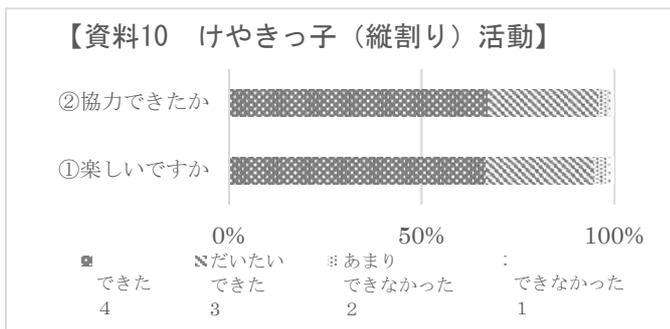
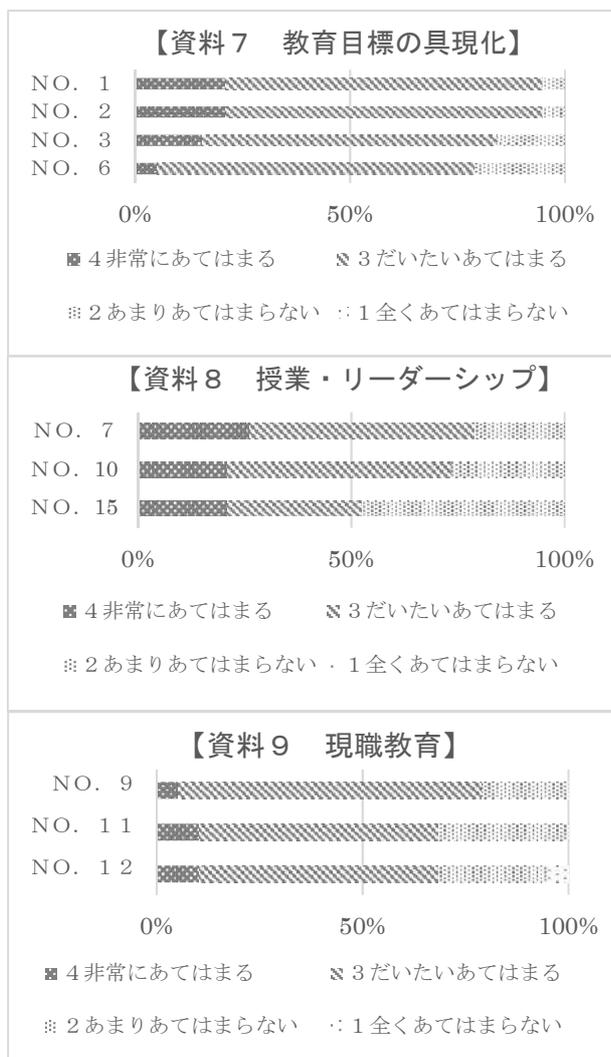
調査時期は毎学期末とし、1～3問を「けやきっ子活動」の実施について、4～6問を「プログラミング教育」について、7～10問を「学習意欲」について質問をしている。

けやきっ子アンケートに関しては、校長をはじめ、教頭、教務主任、校務主任、現職主任、学年主任とで協議し項目を検討し作成した。そして、その集計結果について全教職員で分析をして2学期の教育活動に向けての授業改善や授業計画に活用している。

#### <アンケート結果>

##### ア けやきっ子（縦割り）活動・プログラミング活動

どちらの活動も本校の特色を生かした教育活動であり、「4できた」「3だいたいできた」で95%以上を占め、ほとんどの児童が積極的に取り組むことができた（資料10, 11）。

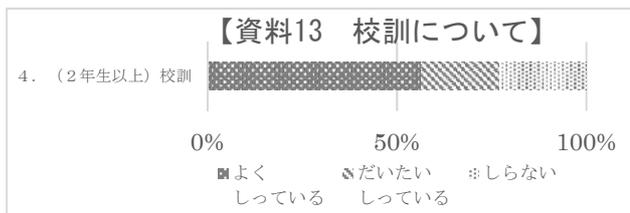
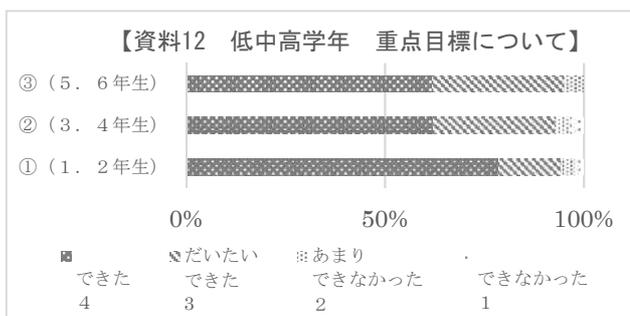


#### イ 低中高学年 重点目標について

1, 2年生で「4できた」と回答した割合が約80%, 「4できた」「3だいたいできた」で100%に近い割合だった。3年生から6年生では, 「4できた」と回答した割合が約60%であったが, 「4できた」「3だいたいできた」で100%に近い割合だった(資料12)。

#### ウ 校訓について

開校30周年を記念して, 昨年度, 地域, 保護者, 児童, 教職員へ募集をかけて制定された校訓について「知らない」と回答した割合が, 20%以上あった。その中でも, 特に低学年で, 覚えていない児童が多く見られた(資料13)。



#### (4) 研究授業, 評価データを基にしたカリキュラム改善

1学期に実施した3年生の研究授業においては, 児童にとって身近なテーマを取り上げたことにより, 児童は意欲的に話し合いに参加し, 最後まで考え抜くことができた。また, 話し合いの結果を実際の生活に生かすことで児童は大きな達成感を味わうことができた。フローチャートを活用することは, 活動の手順を論理的に考える手段として中学年にとっては分かりやすいものであった。この方法は他教科においても活用できるものである。一方, 6年生の研究授業では, 教師が想定していなかった児童の追究していく学びの姿が見られたことから, 今後は児童の実態把握をより丁寧に行い, 主題に迫る授業づくりを進めていく。

学習活動の取組の一環としてプログラミング的思考を取り入れたことで, 児童は難しい課題にも最後まで主体的に課題に取り組むことができた。児童により論理的に考える力を付けさせるために, プログラミングをさまざまな単元等で積極的に取り入れ, 児童の自己肯定感を高めていきたい。

1学期末のカリキュラム・マネジメントに関するアンケートの結果から, 重点目標を理解しているものの実際の取組にまでは至っていないことが分かった。そこで, アンケート結果を全教職員に提示し, 重点目標の再確認と2学期の授業での実践を促した。その他の得点が低かった項目についても改善に向けて確認し, 意識化を図った。また, 研究授業の成果を授業に生かしているかの項目の得点が低かったため, 研究授業の成果と課題をまとめたものを全教職員に配付し, 日々の授業に生かしていくこととした。

2学期においては, 1学期での反省を基に授業づくりを進めた。その結果, 音楽科や算数科の授業では, プログラミングソフト(スクラッチ)を用いた学習を取り入れた。プログラミング的思考を取り入れた学習展開を通して, 児童が主体的に学習に参加し, 意見を進んで発表したり, 他者の意見を見聞きし, 自身の問題解決に生かしたりすることができた。また, タブレットPCや電子黒板などのICT機器, スクラッチなどのソフトウェアの効果的な活用により, 発表の機会の少ない児童や少数意見をもつ児童にも自分の考えを表現する機会を増やし, 達成感や満足感を高めることができた。学習のめあてや, これまでの学習の振り返りを意識させ, 多様な学習形態を取りながら, 学び合う場面の設定をすることもできた。

1, 2学期の実践より筋道を立てて考え, 自他の考えを吟味し, 判断しようとする児童の姿に迫ることができた。しかし, 筋道を立てて考えた後に, それを深め, 別の角度から掘り下げていくような, 多角的な考え方をさせることはまだまだ十分ではないといえる。特に, プログラミングソフトを使用

するときには、児童の活動のねらいを教師が常に意識し、試行錯誤によって経験を増やすことで、児童の発想や活動の幅を広げさせるように工夫していくことが重要であると考えます。

2学期末のカリキュラム・マネジメントに関するアンケート結果からは、1学期に比べほとんどの項目で微増ではあったが伸ばすことができた。全教職員がカリキュラム・マネジメントの視点で、授業改善やさまざまな活動で意識の向上が見られた結果である。しかし、児童のアンケートにおいては、けやきっ子（縦割り）活動・プログラミング活動の項目である「積極的に取り組めたか」「楽しかったか」がともに1学期と比べほぼ横ばいで、低下した結果になった。要因として考えられることは、プログラミング活動においては、各教科の進度が進み、学習内容が難しくなったためであり、けやきっ子活動においては、運動会にも縦割り活動を取り入れ、初めての取組で戸惑いがあったからではないかと考えられる。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

学校教育目標を実現させるために、学校教育活動全体を視野に入れ、児童の実態、学校や地域の特性などを明らかにした上で、ランドデザインを作成することができた。作成したことで、学校の取組の方向性を意識・共有することができ、年間を通して全教職員が教育活動の改善・充実を図ることにつながった。また、学年・学級目標なども、学校教育目標を意識した下位目標となるように設定をし、PDCAサイクルを回してきたことで、学校全体でカリキュラム・マネジメントが意識されるようになった。学校行事、委員会の活動においても、学校教育目標を再度意識するために、目的や意義を全教職員で再確認し改善していくこともできた。研究授業では、各学年の目指す子どもの姿を実現するために、各学年の重点目標・重点教科を決めて共通理解を図ることができた。何よりも、20、30代を中心に教職員の協働体制の意識が高まったことが大きな成果であった。

### (2) 課題

学校教育目標を実現させるために、校務分掌図や学校行事の修正を続けていながら、変更や削除した学校行事、児童会活動等が、学校教育目標を実現させるために適していたかを検証していかなければならない。今回の研究では、教科等横断的なカリキュラム編成や人的・物的資源の整理と活用などについての具体的な方策を示すことは行わなかった。学校評価アンケートや体力テスト、学力テスト、児童に関わる学級担任から見える課題等、学校にあるさまざまな情報と、保護者の思いや教職員の考えも含めて児童の課題、実態を把握して、教科等横断的なカリキュラムの編成をしていかなければならない。

## 参考文献

「カリキュラム・マネジメント ー学力向上へのアクションプランー」 2014.11日本標準 田村知子



「関連性(つながり)」はあるか

生徒や地域の実態(長所や課題)把握の様子		
	【プラス要因】	【マイナス要因】
外部環境	<b>Opportunity (機会)</b> ○ 地域の方が協力的である ○ PTAが学校に主体的に関わってくれる	<b>Threat (脅威)</b> ▲ 校区が狭い ▲ 地域の行事に参加できていない ▲ 業務多忙のため、研修を受けにくい
内部環境	<b>Strength (強み)</b> ○ 優しく、のびのびとした生活を送れる児童が多い ○ 指示された事に対して、きちんと行うことができる ○ 関心意欲が高く学校行事等、意欲的である	<b>Weakness (弱み)</b> ▲ 集団の中で、関心意欲が持続しないときが多い ▲ 主体的に活動(探求)することが少ない ▲ 論理的に説明することが苦手な児童が多い

ア. 教育目標	
4	知・徳・体の調和のとれた健康な児童の育成 なかよく かしこく まっすぐに
③	めざす子どもの姿 児童につけさせたい資質・能力
2	すすんで学び工夫して活動する子 思いやりの心もち、仲良く助け合う子 力いっぱい心や体をきたえる子
1	設定・共有化の様子
4	○校長が決定・職員会議で説明、及び学校経営案にて共有
③	▲あまり意識できていない職員も多い
2	○多くの先生が理解し、前向きにとらえている
1	▲取組が学年によって差がある

① 反映 ↓ ↑ ② 成果

イ. カリキュラムのPDCA			
4	<b>P lan</b> (計画の様子) ↓ <b>D o</b> (実施の様子) ↓ <b>C heck</b> (評価の様子) ↓ <b>A ction</b> (維持・改善の様子)	○年度当初に評価基準・方法を計画している	▲年度当初の計画が浸透されにくい
③		○学年間の相互関係も考慮されている	▲従来の踏襲ではなく学年末に見直す必要がある
2		○教育目標・児童の実態に合わせている	▲プログラミング教育について学校として積極的だが個人差がある
1		○プログラミングを含めた授業を実践している	▲新しい取組もあるため、労力と時間がかかる
4	○年間計画に基づき反省を行っている。	○研究授業において、教育課程の今後の在り方も話し合っている	▲普段の授業についてあまり、メモ等は残していない
③	○研究授業以外については組織的に行われていない		▲研究授業以外については組織的に行われていない
2	○学年によっては、改善しようと動いている。	○来年度に向けて、組織として改善する方向を見定めている	▲指導部会等、組織としての改善が不足している
1			

教育活動

学校内

オ. リーダーシップ (校長、副校長・教頭、主任など)		
4	○校長のリーダーシップのもと、教育目標実現のため努力している	▲学年によって、取組の差が生じている
③	○学年主任と連携をとろうとしている	▲若い教師への細かな支援まで手がまわらない
2		
1		

「対応(つながり)」はあるか

「対応(つながり)」はあるか

経営活動

ウ. 組織構造(工夫や課題)	
4	○英語専科、少人数など多く配置されている
③	○ICT支援員が他校より多く配置されている
2	▲臨時的任用講師、初任者も毎年、配置されるため、人材育成まで手がまわらない
1	○Ipad等プログラミングを行うための機器が整備された
	▲学校業務の簡素化が行われているが研修等の時間が生み出せない
	○希望通りではないが、修繕等、整備していただいている
	▲消耗品の予算が少なく、ICT機器関連で多くの出費
	○長期休暇を生かして研修を行っている
	▲若い職員とベテランの間で調整するミドルリーダーが不足
	▲ミドルリーダーに拘らず、リーダーの育成が急務

エ. 組織文化	
4	○職員が学校の特色をよく理解している
③	○少規模の学校のため、児童の情報を共有しやすい
2	▲少規模がゆえに学年ごとで取組に差がでてくる
1	○のびのびとした児童が多い
	○まじめである
	○若い職員が多く、明るい雰囲気をかもしだす
	○子どものために費やす労力を惜しまない職員が多い
	▲経験が浅い職員が多く、強い意見に流される場面がある

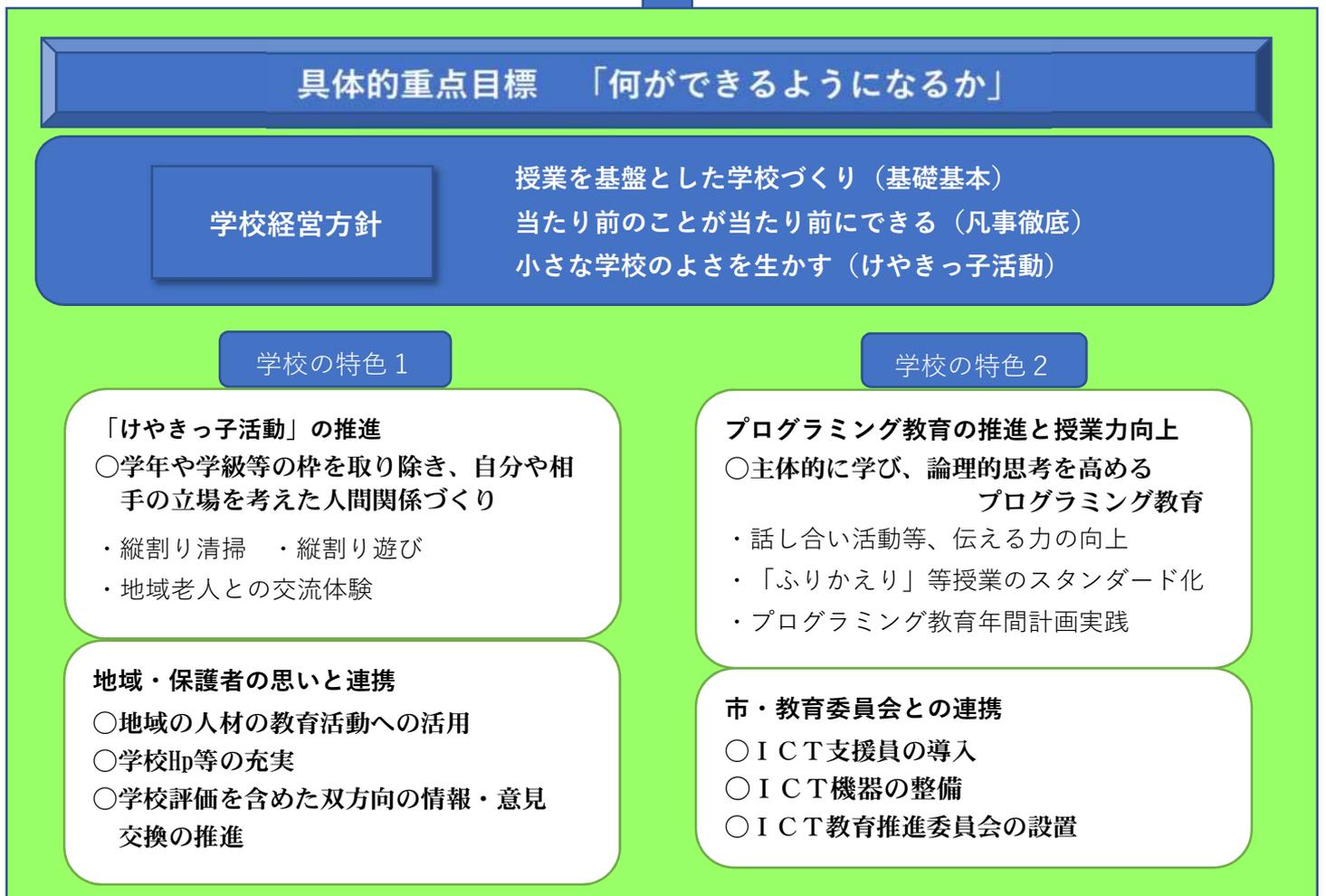
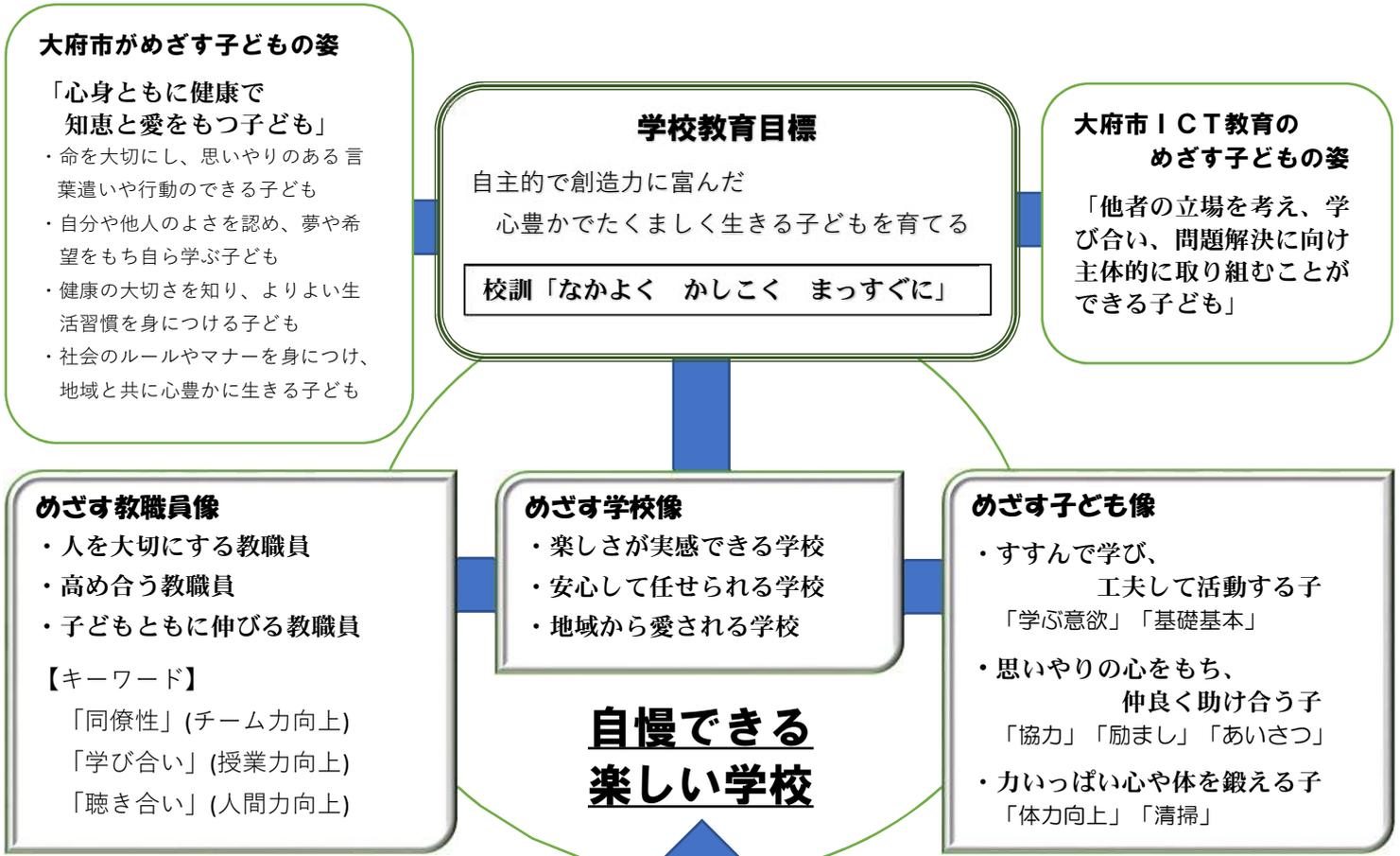
⑪ 連携・協働 ↓ ↑ ⑫ 指導・支援

カ. 家庭・地域社会等(他校・企業なども含む)	
4	○OPTAの活動等、多くの職員が積極的に参加している。
③	○プログラミング教育の授業実践では公開し、他校の多くの先生から意見をいただける
2	○プログラミングに関しては、ヘルプデスクを行っている業者がバックアップしてくれる
1	▲職員の人数が少なく、なかなか地域へ出て行く行事には参加しにくい

キ. 教育行政(文部科学省、教育委員会、総合教育センターなど)	
4	○学校訪問等で指導主事からご指導を受けている
③	○総合教育センターで様々な研修を受けている
2	○ICT教育推進委員会が教育委員会主導で行われ、プログラミング教育を推進している
1	○大府市はICT教育を積極的に推進している
	▲業務多忙のため、研修を受けにくい
	▲市教委と学校現場の先生の考えとの整合性が取れていない面がある

学校外

# 【添付資料3】 2019年度 東山小学校 グランドデザイン



【添付資料4】 資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントシート

○学校教育目標

自主的で創造力に富んだ

心豊かでたくましく生きる子どもを育てる

校訓「なかよく かしこく まっすぐに」

○自校の児童・生徒につけさせたい資質・能力

自己肯定感 伝える力 主体性 他とのかかわり 試行錯誤する力

主体的に学びに向かう力 仲間のために役立とうとする意識

プログラミング的思考 プレゼンテーション能力 聞く力 等

【 生活・学級活動 】

伝える力

プログラミング的思考

アンプラグドプログラミングを活用し、フローチャートの作成時に相手に分かりやすく伝える活動を取り入れる。

【 体 育 】

他とのかかわり

仲間のために役立とうとする意識

誰とでも仲よく、協力したり助け合ったりして様々な運動をすると、楽しさが増すことを体験する。

【 算 数 】

自己肯定感

学び合いの中で、理解を深め、問題が「解けた」「できた」という達成感を味わわせる。

【 総合的な学習の時間 】

主体性

主体的に学びに向かう力

実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ表現する。

【 社 会 】

プレゼンテーション能力

さまざまな資料や調査活動を通して、情報を適切にまとめ、発信する。

【 国 語 】

聞く力

相手の意見を聞き、自分の考えと同じところや、違うところを考える。

自校の教育目標の実現に向けた現状の把握

児童生徒の実態

強み まじめ 素直 優しい

弱み 主体性に欠ける 消極的 自己肯定感がやや低い

論理的に説明することが苦手

【添付資料5】各教科でのカリキュラム・マネジメントシート

目指す学校像 (学校教育目標)	校訓「なかよく かしくく まっすぐに」 自主的で創造力に富んだ 心豊かでたくましく生きる子どもを育てる
--------------------	--

学校で育成すべき 資質・能力		知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性	
各教科等の 学びや様々な活動をつなげる	各教科	国語	日常生活に必要な漢字を含めた語彙の知識	相手や目的に応じ、言葉で伝え合う力	自ら言語感覚を養い、国語を大切にしてい、思いや考えを伝え合おうとする態度
		社会	様々な資料や調査活動を通して、情報を適切にまとめる技能	社会的事象等の課題を確実に把握し、多角的に考え、表現し、議論する力	よりよい社会を考え学習したことを生活に生かし、他とのかかわりの中で、家庭・地域そして、国際社会の一員としての自覚
		算数	数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則の理解 事象を数学的に処理したり、推論したりする技能	日常の事象を筋道を立てて考え、数学的な表現を用いて、簡潔・的確に表現する力	算数的活動の楽しさに気付き、粘り強く考え、学習を振り返り、考えを深める態度 多様な考えを認め、問題をよりよく解決しようとする態度
		理科	自然に関する事物・現象についての実感を伴った理解 より適切なデータを得るための、実験や観察の技能	主体的に問題を見出し、予想・仮説を通して、結果を分析し結論を見いだす力(問題解決能力)	自然を愛する豊かな心情 自然の規則性を見つける喜びを感じたり、友人と伝え合い、真理を導き出したりする姿勢
		生活	身近な生活圏の人・自然・公共物等を自分の生活との関りの中で捉える技能	体験や表現することを通して、自分の生活をよりよくなる力	身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活したりする姿勢
		音楽	楽しく音楽と関わる活動を通して、表現したい音楽表現をするための知識・技能	音楽を味わって聴き、感じとったことを伝え合う力	協働して音楽活動をする楽しさを味わうことで、音楽を愛好する心情と生活の中に音楽を生かそうとする態度
		図工	表現する喜びを味わわせるとともに、造形的な創造的活動を行うための技能	造形的なよさや美しさについて考え、作品に対する自分の見方や感じ方を深める力	主体的に表現したり、鑑賞したりする活動に取り組み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度
		家庭	衣食住やものづくりなどに関する実践的・体験的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的な理解とそれに係る技能	日常生活の中から問題を見いだして、課題を設定し、解決方法について表現するなど、試行錯誤しながら課題を解決する力	家庭生活を大切にできる心情 家族の一員として、生活をよりよくしようとする実践的な態度
		体育	身近な生活における健康・安全についての理解 基本的な動きやそれに係る技能	運動や健康についての課題を見付け、その解決にむけて、思考・判断し、伝え合う力	心身の健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度
		外国語	語彙、表現などについて日本語との違いに気づき、読むこと、書くことに慣れ親しみ、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能 異なる文化をもつ人との交流などを体験し、外国の文化に対する理解	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる力	日本とは違った外国の文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度
		特別の 教科 道徳	道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、振り返りを通じた自己の生き方についての学習を深める活動を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。 ・だれにでも親切にし、人の立場に立って考える。 ・進んであいさつをし、自主的に行動する。 ・希望と勇気をもって、粘り強く努力し続ける。		
総合的な学習 の時間	各教科における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から捉え、実社会・実生活の課題を探求し、自己の生き方を問い続ける見方・考え方	実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ、表現する力	自らの知識や技能を働かせて、他と関わりながら、よりよく課題を解決する態度 よりよく課題を解決する中で、常に自己との関係で見つめ、振り返り、問いつけていく姿勢		
特別活動	多様な他者と協働する様々な集団生活の意義を活動する上で必要となることの理解と行動の仕方の技能	集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために互いのよさや可能性を發揮しながら、話し合い、合意形成を図ったり、意志決定したりする力	集団活動を通して身に付けたことを生かして、人間関係をよりよく形成するとともに、自己を振り返り、生き方について考えを深める態度		

## 【添付資料6】 けやきっ子アンケート（1がっき）

ねん くみ ばん なまえ

☆ひがしやましょうがっこうのみなさんの せいかつやがくしゅうについて しつもんします。

し つ も ん	できた 4	だいたい できた 3	あまり できなかった 2	できなかった 1	合計
あてはまるところに○をつけましょう					
<b>1. たてわりかつどうについて</b>					
①たてわりかつどうは、たのしいですか。	274	115	14	8	411
②たてわりはんのなかまときょうりよくして、かつどう することができましたか。	276	118	11	6	411
③（1. 2. 3年生）おにいさん・おねえさんの はなしをきいて、かつどうできましたか。	165	40	5	5	215
④（4. 5. 6年生）低学年のことを考えて、話し合ったり、 行動したりすることができましたか。	105	78	6	4	193
⑤（2年生以上）たてわりかつどうで「いいな」 「よかったな」とおもうことはなんでしょう。					
<b>2. プログラミングがくしゅうについて</b>					
①プログラミングがくしゅうをとりいれたじゅぎょうは、 たのしいですか。	348	50	8	2	408
②プログラミングがくしゅうのめあてをきいて、 じぶんなりにとりくむことができましたか。	348	50	8	2	408
③これまでのがくしゅうでわかったことをいかして とりくんだり、くふうしたりすることができましたか。	234	137	15	4	390
<b>3. がくしゅうぜんたいについて</b> ※各学年の重点目標に関して					
①（1. 2年生） がっこうでのがくしゅうはたのしいですか。	110	22	5	3	140
②（3. 4年生）むずかしいもんだいでも、 あきらめずにとりくむことができましたか。	86	42	5	5	138
③（5. 6年生）自分で知りたいことを調べたり、 考えたりすることができましたか。	75	40	6	0	121
<b>4. （2年生以上）</b> 校訓（こうくん）をしていますか。 あてはまるところに○をつけましょう	よく している 173	だいたい している 64	しらない 70		307